

淑明女子大学とのジョイント教育（2005 年度）講評

お茶の水女子大学人間文化研究科 教授
小風 秀雅

淑明女子大学との日本学ジョイント教育は、3 日間にわたって淑明女子大学を会場として、実施された。初日は「日本の文化と社会」、二日目は「国際社会と東アジア」というテーマで、それぞれ両大学 2 名ずつの教員および 2 名ずつの大学院生による報告からなる共同ゼミを行った。三日目には参加院生による自主ゼミが実施された。なお、ゼミの内容が日本学の方針ということで、使用言語は日本語とした。

以下、報告内容を簡単に要約し、共同ゼミの成果について纏めたい。

【共同ゼミ（1）「日本の文化と社会」】

淑明女子大学の権肅寅先生による共同ゼミ開催に関する趣旨説明の後、4 本の報告が行われた。報告者、論題、概要は以下の通り。

1. 神田 由築（お茶の水女子大・助教授）「歌舞伎『勧進帳』の背景 —『杖で打たれる』ということ—」

神田報告は、歌舞伎「勧進帳」にみられる弁慶が義経を「杖で打つ」という行為が持つ社会的意味の検討を試みたものである。日本においては杖で打たれる（杖を負う）ことが喧嘩によって雪がなければ回復できないほどの恥辱であったこと、しかし同時代の朝鮮ではそうした感覚がなく、この違いに起因する対馬藩通詞による朝鮮通信使殺害事件（1764 年）が起きていること、しかし、日本でも近代になると恥辱の感覚が忘れられていったこと、が指摘され、近世日本と現代の日本、近世の日本と朝鮮の文化の違いが明らかにされた。

2. 李 志炯（淑明女子大・助教授）「韓国での日本文学受容の意味 —1980 年代以降を中心に—」

本報告は、現在の韓国での日本小説ブームを理解するために、韓国において日本文学がどのように受容されてきたか、を概観し、さらに島崎藤村の「新生」を取り上げて、植民地と女性の象徴的なオーバーラップ、二重の他者としての植民地女性について論じた。最後に、文学の危機をめぐって、大衆から疎外され研究が行われていることが問題であり、文学研究と教育の場をどのように接合すべきかに課題があるとした。

日本文学受容については、文学そのものの良さに対してというよりも、ただ熱狂的な感覚を文学に対して持つことや、売ればよいというような社会的現実には、違和感があるとし、このような現状に対し、文学教育が重要な役割を果たすのではないかとした。

3. 申 裕媛（淑明女子大・院生）「肥前名護屋城とその城下町について」

本報告では、朝鮮侵略の際に豊臣秀吉が築城した肥前名護屋城の築城過程や技術、城下町の構造について検討した。

名護屋城は、築城技術としては安土城・大阪城と同様の近世的な特徴を有しているが、石垣の積み方や平地に建設されていないこと、都市と農村部が入り交じっていること、城下町にはただの職人町ではなく武器に関わる町名が多いこと、などを指摘して、中世・近世 2 つの時代の特徴がみられることが明らかにされた。

4. 大矢 悠三子（お茶の水女子大・院生）「鉄道の開通と「湘南」イメージの形成

ー海水浴の受容と発展との関連を軸にー

本報告は、「湘南」（神奈川県相模湾沿岸地域）の地域イメージの形成過程について、海水浴が西洋医学の受容とともに始まったこと、横浜居留地の外国人の影響により別荘化が進んだこと、から西洋イメージが強調されたことを指摘した。また、東海道線の開通とともに相模湾沿岸に海水浴場が林立し、さらに江ノ島電気鉄道（江ノ電）の開通（藤沢・鎌倉間）によって、東藤沢・江の島・鎌倉という周遊ルートが確立して大衆化が進んだことにより、「湘南」イメージが確立した、とした。

【共同ゼミ（2）「国際社会と東アジア」】

共同ゼミ（2）における報告者と報告内容は以下の通り。

1. 小風 秀雅（お茶の水女子大・教授）「19 世紀の不平等条約と東アジア

ー不平等条約体制の機能についてー

本報告は、19 世紀中葉に欧米と東アジアの間に形成された不平等条約体制の機能について明らかにした。この体制は、アジアでは、植民地化を狙った侵略の体制であるとされているが、条約は経済的利益を確保することを主眼としたものであり、欧米列強は、東アジアの諸国に国家主権を認めることで、東アジアとの関係を安定的かつ円滑に継続することを目指していた、と結論した。ただ、協調を目指す不平等条約体制が近代世界システムのなかのサブシステムとして機能していたというのは欧米からの視点であり、東アジアの関係の中でみると機能は異なるとした。

2. 朴 晋雨（淑明女子大・助教授）「民間レベルでの日韓交流になにが必要か」

本報告は、民間レベルでの日韓交流を推進してきた経験を踏まえて、相互理解を深めるための前提として、歴史認識の問題、文化的な相違性に対する理解、地域間交流のあり方、「隣語」に対する関心、の 4 つを挙げ、日韓の違いをどのように乗り越えていくか、についての提言がなされた。

質疑応答のなかで報告者は、自分の国に対する愛国心があるように、それぞれの国にも愛国心があることを認めて相互に理解することが重要であると述べ、民間レベルでの日韓交流のプログラムは金銭的には困難だが、今後も「平和」と「人権」を柱として続けていくつもりであると述べた。

3. 古結 諒子（お茶の水女子大・院生）「日清戦争下の外交関係 ー『三国干渉』への道」

本報告は、日清戦争の開戦から「三国干渉」に至る列強と日本の外交交渉過程を明らかにすることによって、世界史的な視点から日清戦争を再考した。当時の外交関係の基調を反露親英と理解する通説に対して、列強の反対のなかで日清開戦に持ち込むために、日本は列強の利害対立を利用しており、イギリスの意向に沿って開戦に持ち込んだのではないこと、また三国干渉の際、イギリスは裏で手綱をひき、ロシア・フランスはそれに追随していたことを指摘し、事実上の四国干渉であった、とした。

4. 朴 玟宣（淑明女子大・院生）「1945 年～1953 年の‘在日’マイノリティー運動の研究現況と課題

ー在日本朝鮮人連盟と沖縄人連盟を中心にー

本報告は、日本の中のマイノリティーである、‘沖縄人’と‘在日朝鮮人’を取り上げ、彼らが「他者」という位置からどのように自己規定したかという問題から日本の戦後社会を考察しようとする問題意識に基づいて、研究の状況をまとめたものである。

質疑応答のなかで、‘在日’と‘沖縄’ 2 つの比較を行うことによって、何を明らかにしようと考えているのかという質問に対し、報告者は、日本におけるマイノリティーは戦前戦後を通してその構造は変化して

いないことを指摘し、日本は戦後に、平和国家・民主主義を柱に掲げたが、その裏にいるマイノリティーを通すことによって、その本質を明らかにしたいと答えた。

【参加学生による自主ゼミ】

最終日は、金亮我さん（お茶の水女子大・院生）の司会で、両校の参加者による自主ゼミが行われ、教員も議論に参加した。参加者と報告テーマは以下の通りである。

淑明女子大学	金 仁京	『恍惚の人』についての検討」
	黄 正媛	「日本における韓国大衆文化の受容に関する研究 －韓流の現状と効果－」
	朴 嫺榮	「日本の伝統芸術が近代西洋の芸術に及ぼした影響とその背景について －浮世絵と能を中心に－」
	李 政炫	「日本人の集団意識（日本の漫画を通して見た）」
	金 準榮	「日本中小企業の賃金制度に関する研究 －IT と BT 産業を中心に－」
お茶の水女子大学	高垣 亜矢	「近世筑前国の皮革流通について」
	張 芑	「戦間期東京の都市計画と地下鉄建設」
	伴 ゆりな	『皇室』に関する日本の政策 －日本の皇室制度と韓国併合後の旧韓国皇室の処遇、『満州国』帝室のあり方－」

以上、3 日間にわたる共同ゼミでは、多様なテーマが取り上げられ、また韓国・日本の観点から様々な議論が展開された。とくにお茶の水の学生にとっては、淑明側の報告は、日本が外からの視点で論ぜられるという点で、いずれも大変刺激的であり、日本の中で日本を研究することの一種の「限界」を感じたという意味で、大きな教育的成果があったと思われる。

お茶の水側の参加者は全員日本史専攻であったが、淑明の文学、経済、文化人類学などの報告についても、興味深く聴くことが出来たのも、こうした日本を見る視点の斬新さによるものであったと考えられる。

お茶の水側の報告では、神田、小風、古結の3 報告また自主ゼミでの伴報告が、日韓比較ないしは日韓関係を論じたものであったが、討論においては、日本研究の伝統に裏打ちされた淑明側の意見には、日本では見逃されがちな視点が指摘されたり、日韓比較の視点が提示されるなど、実り豊かなものとなった。

そして共同ゼミの最大の成果は、講演会や集中講義とは異なり、ゼミという日常的な教育の場においていつものメンバーのままで、両大学の学生が直接討論を展開したことにある。留学ではそうした経験は限られた人数の学生しか体験できないが、共同ゼミでは、すべての学生に平等にその機会が与えられたのである。

最後の懇親会においては、こうした意味に於いて共同ゼミが両校にとって大きな研究・教育上の刺激となったことが確認され、今後も一層交流を強化していくことが合意された。

日常的に教育プログラムを共有し、相互に活用していくことの重要性が確認されたという点で、今回の試みは成功であったと位置づけられよう。それは、ひいては学生の研究に対する意欲を掻き立て、一層の飛躍と成長をもたらすことにつながり、大学院教育の国際的な充実とレベルアップに寄与するであろう。

【付属資料】 日程表

<2月7日（火）> 出国

羽田空港より出発、金浦空港に到着。
淑明女子大学到着後、共同ゼミの打ち合わせ

<2月8日（水）> 巡見

午前：ソウル大学内奎章閣
午後：国立中央博物館
夕食：歓迎会

<2月9日（木）> 研究報告

司会 権 肅寅（淑明女子大学校 准教授）
報告者：神田 由築（お茶の水女子大学 助教授）
李 志炯（淑明女子大学大学校 助教授）
申 裕媛（淑明女子大学校 大学院生）
大矢 悠三子（お茶の水女子大学 大学院生）

<2月10日（金）> 研究報告

司会 権 肅寅（淑明女子大学大学校 准教授）
報告者：小風 秀雅（お茶の水女子大学大学院 教授）
朴 晋雨（淑明女子大学校 助教授）
古結 諒子（お茶の水女子大学 大学院生）
朴 玟宣（淑明女子大学校 大学院生）

<2月11日（土）> 自主ゼミ

午前：資料準備
午後：自主ゼミ報告会
司会 金 亮我（お茶の水女子大学 大学院生）
報告者：金 仁京（淑明女子大学校 大学院生）
高垣 亜矢（お茶の水女子大学 大学院生）
朴 嫻栄（淑明女子大学校 大学院生）
李 政炫（淑明女子大学校 大学院生）
黄 正媛（淑明女子大学校 大学院生）
張 芑（お茶の水女子大学 大学院生）
金 準栄（淑明女子大学校 大学院生）
伴 ゆりな（お茶の水女子大学 大学院生）
夕食：懇親会

<2月12日（日）> 帰国

金浦空港より出国、羽田空港にて解散